

## 広がる仙台北城下

仙台北城の築城とともに、城下の建設も開始されました。政宗とともに米沢から岩出山、さらに仙台北へと移ってきた御譜代の町人町を取り囲むように侍屋敷が配置され、城下の屋敷割がなされました。城下の範囲は、元和・寛永期の藩施設や寺社の建設とともに拡張され、延宝・元禄期には家臣の増加にあわせて人口の過密化が進みました。元禄期の城下の人口は、一説では6万人ともいわれていますが、この時期をピークに18世紀以降は、度重なる飢饉などで減少していくことになります。



「奥州仙台北城絵図」  
正保2・3（1645・46）年 齋藤報恩会蔵



「仙台北城下絵図」  
寛文4（1664）年 宮城県図書館蔵

## 政宗晩年の若林城と城下町

政宗は、寛永4（1627）年に居館の若林城（現宮城刑務所）を築城します。これとともに家臣・町人の一部がその周囲に移住し、小城下町が形成されました。政宗は、この若林城下の北西に生母の菩提を弔う保春院を建立しています。南小泉、養種園遺跡の発掘では、若林城下と考えられる区域から、この頃の建物跡や井戸跡、金箔瓦が出土した墓などが発見されています。若林城や城下は政宗の死とともに、寛永15（1638）年頃に廃絶します。



若林城跡（東より）

第33回文化財展パンフレット  
発行 仙台市教育委員会文化財課  
仙台市青葉区国分町三丁目7-1  
TEL/022-214-8892~94  
発行月 平成12年9月  
印刷 (株)共新精版印刷  
※ 表紙写真(上)協力 高倉 淳



古紙配合率100%再生紙を使用しています

## 仙台開府四百年記念

# 戦国から近世へ 城・館・町



仙台市教育委員会



## はじめに

今からちょうど400年前、関ヶ原の戦いが終わった直後の慶長5（1600）年に伊達政宗は仙台北城の築城を開始しました。城下町の建設もこれと並行して行われ、現在の仙台市街地の礎ができあがりました。仙台北城の様子、現存する城下絵図や文献史料によってうかがい知ることができます。

これに対して、仙台開府以前の「城と町」の様子は、市内各地に数多くの城・館跡が確認されているものの、文献史料が乏しく一般にはよく知られていなかったといえます。ところが近年の発掘調査により、市内でも戦国時代の大規模な遺跡がいくつか発見され、政宗開府以前の仙台の様子が少しずつ明らかになりつつあります。

今回の文化財展では、発掘調査の成果をふまえながら戦国から近世への時代の変換期に焦点をあて、「城・館・町」を題材に、当時の様子を振り返っていきたいと思います。地中から掘り出された生活の跡と、そこから出土した遺物をじっくりとご覧いただき、実物資料によって歴史の空白を埋めていく考古学の醍醐味を肌で感じていただければ幸いです。



中世の仙台平野

## 関係年表

時代	できごと
鎌倉	1294 留守家政、塩竈神社の地頭職を譲り受ける 1333 陸奥守北畠顕家、多賀国府に来任
南北朝	1337 多賀国府が北朝方に落ちる 1345 北朝方の奥州探題吉良貞家・畠山国氏、多賀国府に来任する 1351 吉良貞家が、畠山国氏を岩切城に討つ（岩切城の戦い）→畠山方の留守氏一時没落 南朝軍が北朝軍と戦いこれを破る（広瀬川の戦い） 1352 足利尊氏が、留守氏の所領を安堵する（翌年取り消す） 1354 斯波家兼が奥州管領になり、大崎に入る（後の大崎氏） 1355 大崎氏が留守氏の所領を再び安堵する ・・・この頃、政治の中心は多賀国府から大崎に移る・・・ 1377 留守氏、9世伊達政宗と同盟（一揆契約）を結ぶ
室町	1394 これより3年間、留守氏に内紛（伊達派と大崎派の争い→伊達派の勝利） 1438 留守氏、はじめて当主を伊達家から迎える（郡宗）→伊達系留守氏の成立 1457 青葉区上愛子諏訪神社棟札「国分宗治」～国分氏に関する最古の棟札
戦国	1499 この年、大崎氏の領内乱れ、伊達氏介入する 1500 留守景宗、伊達氏から入嗣する 1522 伊達種宗、陸奥国守護職となる 1536 種宗、『塵芥集』を制定する 1542 種宗・晴宗父子が争う（天文の乱） 1558 この頃、伊達晴宗が奥州探題に任じられる 1565 伊達輝宗、家臣を「国分」に遣わし馬を購入（国分領に馬市のたつ町場の存在を示す） 1567 伊達政宗、米沢に生まれる。留守政景、伊達氏から入嗣する 1570 留守政景、居城を岩切城から利府城に移す 1577 国分盛重、伊達氏から入嗣する 1584 政宗、家督を継ぐ 1586 国分領内で内乱 1587 国分盛重、米沢へ移る。国分領内は伊達氏の直轄領となる 1590 政宗、小田原に参陣。豊臣秀吉の奥州仕置により、大崎氏、葛西氏所領を没収される 政宗、蒲生氏郷らとともに葛西・大崎一揆を平定 1591 政宗、米沢から岩手沢に移り、地名を岩出山と改める 1596 国分盛重、佐竹氏のもとへ出奔（国分氏没落） 1600 「北目城」上杉攻めの拠点となる 政宗、「国分日町」で馬を11頭買わせる（国分領に馬市のたつ町場の存在を示す） 12月、政宗、千代を仙台と改め、仙台北城の縄張りを開始する
江戸	1602 仙台北城下町建設の人夫、重労働に反抗し騒動を起こす（御小人騒動） 1605 この頃までには、国分日町の住人を仙台北城下に移住させる 1610 仙台北城大広間の造営成る 1611 慶長の大地震 1616 元和の大地震 1627 政宗、幕府の許可を得て若林城を築城 1628 家臣・領民の一部を若林城下町へ移す 1636 政宗死去する 1638 二代藩主忠宗、仙台北城二ノ丸を造営する。この頃までには、若林城下町廃絶する 1639 若林城破却される 1646 正保の大地震 1668 寛文の大地震 1692 四代藩主綱村、若林の地に小泉屋敷を造営する



# 留守氏の城下町「たがのこう町」

留守氏の歴史は古く、1190年に源頼朝から「陸奥国留守職」を任ぜられた伊沢家景に始まります。これ以降代々留守氏を名乗り、中世を通して有力領主に発展しました。南北朝の動乱から戦国時代と盛衰を繰り返しながらも、国分氏と並んで覇を競い、宮城郡東部を勢力下に治めました。

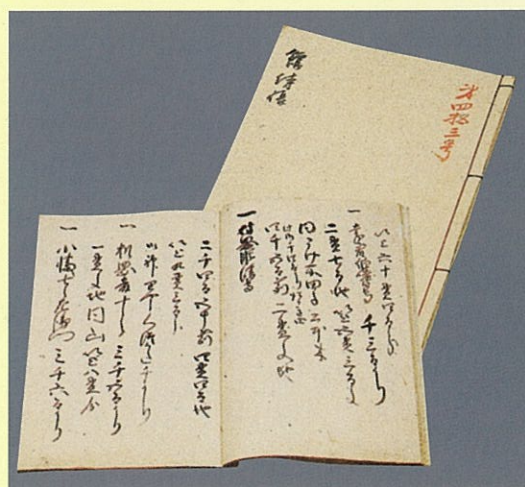
## 眼下を見下ろす山城「岩切城」

仙台市宮城野区岩切北部の丘陵地に岩切城があります。岩切城は高森城とも呼ばれ、室町時代から戦国時代にかけて留守氏が居城とした山城です。広さは東西700m、南北400mを超え、頂上部の標高は106mにも及びます。城跡に現在も残る土塁・堀切・土橋・堅堀などは戦国時代のものと考えられ、築城当時から少しずつ改修を加えながら堅固な要塞として使用されました。城の頂上部からは仙台平野の東部が一望でき、留守領の中核部を見渡すことができます。

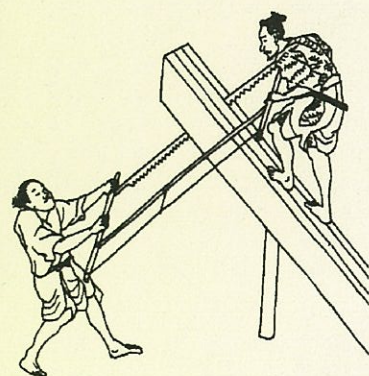


国指定史跡 岩切城（高森城）跡

## 「たがのこう町」 一 洞ノ口遺跡 一



『留守分限帳』 水沢市立図書館蔵



天文年間（1532～55）の史料『留守分限帳』には、戦国時代の留守領に、「塩かま町（塩竈町）」と「たがのこう町（多賀国府町）」の二つの町があったことが記されています。また、町には留守氏直属の家臣やかかわらけ（土器）作りの職人・鑄物師・大工などが居住していたことも記されています。岩切城の眼下に位置する「たがのこう町」は、留守氏の城下町を形成する空間だったと考えられます。



館を区画する大規模な堀

仙台市宮城野区岩切の洞ノ口遺跡の発掘調査では、堀や土塁などに囲まれた大規模な館跡が発見されました。この館の使用者は明らかではありませんが、留守氏に関わる可能性が考えられます。発見された館の周辺には町場が広がっていたものと考えられることから、今後の周辺の調査が期待されます。

# 国分氏の居城「千代城」と館跡

鎌倉時代の宮城郡の領主である国分氏は、南北朝の動乱を生き延び、戦国時代には国人領主として勢力を広げていきます。しかし国分氏に関わる文献史料は少なく、その実態は明らかになっていません。かろうじて市内各地に残る神社の棟札や国分氏の菩提寺と言われる保寿寺の梵鐘銘にその名残をとどめています。

## 発見された「千代城」

鎌倉から下向した国分氏は、はじめ「郷六城」に入り、後に「千代城」を居城としたといわれています。

『伊達治家記録』によれば、政宗は千代城の跡地に仙台城を築いたと記されています。仙台城本丸跡の発掘調査では、伊達政宗築城以前の山城の門を伴う入口（虎口）跡が発見され、現在の本丸の周辺に「千代城」が存在したことが明らかになりました。



「千代城」門を伴う入口（虎口）跡

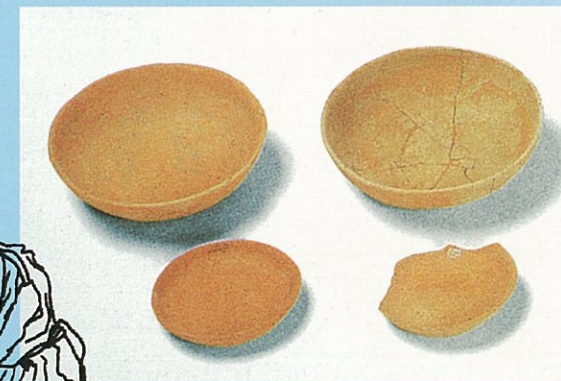


南小泉遺跡で発見された館の大堀 14世紀以降

この館跡と周辺の屋敷では、宴席の際に使われた「かわらけ」と呼ばれる土器や高級な陶磁器が出土しました。これらの品々を使用することのできる階層は当時限られており、この館跡や屋敷が国分氏とその家臣団に関与した可能性が考えられます。

## 中世の屋敷群 一 南小泉遺跡 一

仙台市若林区の南小泉遺跡からは、鎌倉時代から室町時代にかけての大きな屋敷跡がいくつも発見されました。屋敷跡は溝で囲まれ、内部には掘立柱の建物跡や半地下式の倉、井戸などがみついています。中でも14世紀後半頃につくられた館は、幅約15mの巨大な堀と土塁に囲まれたひととき堅固なものです。また、この周辺からは道路跡や水路跡なども発見されています。



南小泉遺跡で出土したかわらけ



# 国分氏の「国分日町」

こくぶんひまち



## 戦国時代の遺構群 — 養種園遺跡 —

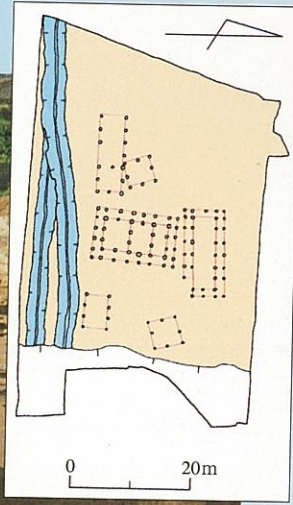
ようしゅえん

若林区役所の南に隣接する養種園遺跡の発掘調査では、戦国時代から近世初め頃の遺構が広範囲に発見されました。屋敷を区画する溝跡は格段に大規模となり、V字型に深く掘り下げられています。また、建物も大形となり、中国産の青花（染付の磁器）や瀬戸・美濃地方の陶器などが大量に出土しました。

延宝年間（1673～80）に編纂された『仙台古城書上』には、小泉村にはかつて二つの「古城」があって国分氏が在城していたことが記されています。養種園遺跡の付近は、国分氏と家臣団、さらに領民の住む居住域だったのではないかと考えられています。



養種園遺跡で発見された屋敷を区画する溝跡



V字型の堀底

## 「国分日町」 — 市町の鍛冶職人 —

養種園遺跡の北方700mには、陸奥国分寺があります。戦国時代には、この門前に「国分日町」という市町があり、伊達政宗やその父輝宗が馬を買い求めた記録も残っています。

また、養種園遺跡の発掘調査では、戦国時代の鍛冶炉や鉄鍋の鋳型など鉄製品の生産に関わる遺構や遺物が多く発見され、この市町周辺に鋳物師や鍛冶職人が居住していたことを物語っています。



捨てられた鉄くず



鍛冶炉の跡

# 伊達政宗の仙台開府

## 上杉攻めの拠点「北目城」

きため

仙台市若林区、広瀬川と名取川に囲まれた自然堤防の上に築かれた北目城跡は、戦国時代、粟野氏が居城とした城で、周囲には町場があったと考えられています。関ヶ原の戦いの際、上杉氏と対峙した伊達政宗はこの城を拠点として改築しました。発掘調査によって発見された北目城の堀跡は幅約14mにもおよび、掘底には畝状の高まりを作り、敵の移動を制限させる「障子」という複雑な構造がみつけられました。



上/北目城跡 発掘調査範囲  
右/出土した「脇差」



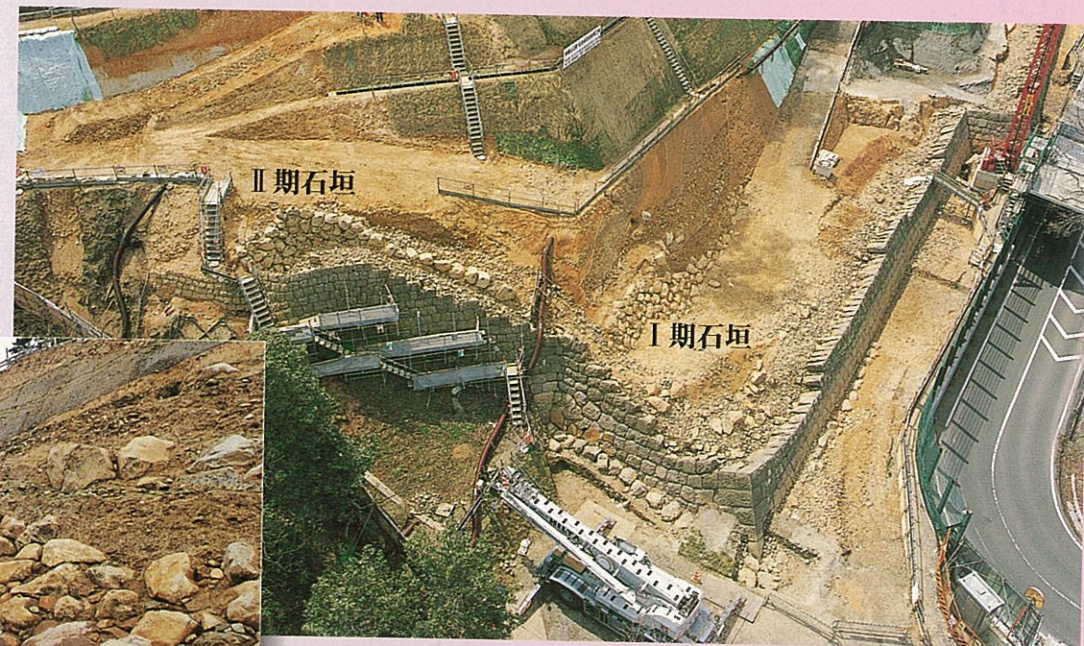
障子のある堀跡

## 仙台城築城 — 近世の幕開け —

関ヶ原の戦いが終わって間もない慶長5（1600）年12月24日、伊達政宗は仙台城の築城を開始しました。この時期の石垣が発掘調査によって大規模に発見され、今まで不明だった築城期の本丸の姿が明らかになってきました。

築城期の石垣は、現存する三世代目の石垣や発見された二世代目の石垣に比べ、複雑な形状を持った戦略的な性格の強い山城であったと考えられています。

発見された築城期（I期）の石垣



現存石垣（III期）の背面から発見されたI・II期石垣